

第4回 ふう太の杜 常田富士男文学賞 講評

第4回 ふう太の杜 常田富士男文学賞には、

第1部 「創作昔ばなし」部門に 53編

第2部 随筆 テーマ「秋祭り」部門に

一般 38編

小中学生 45編

計136編の応募があった。コロナ禍の中、全国から作者の心の思いを織り込んだ作品が寄せられたことに、まず感謝申し上げたい。

受賞作品についての要旨と感想を述べ、講評に代えたい。

一 第1部 創作昔ばなし 部門

常田富士男賞

曲がったキュウリ 東京都北区 増田 信

人間とカッパとの交流を描く。カッパは昔話では妖怪の一つとして、異類婚姻譚が全国の昔話で見られる。しかし、本作品では長吉という子供とカッパのタロとの交流を描く。人間にとって不必要な曲がったキュウリが、カッパにとってはとてもおいしい食べ物であり、カッパにとって出来損ないのお皿が人間にとっては高価な皿であるという設定。長吉とカッパのタロとの交流の中で「そっか、みんなそれぞれ、ちょうどいいもんっっちゃうのは、違うもんやなあ」という長吉の気づきは、人間とカッパとの区別意識では無く、人間とカッパとの異類共存譚となっている。昨今SDGsについての取り組みがユネスコを中心に展開されているが、①「貧困をなくそう」②「飢餓をゼロに」⑤「ジェンダー平等を実現しよう」⑩「つくる責任、つかう責任」⑱「パートナーシップで目標を達成しよう」などの目標が盛り込まれている。話し口調の文体と、ハッピーエンド集結することで、「語り」としての普遍性と安心感を齎している作品となった。

佳作

どんどろや山のあか 群馬県館林市 蓮見国彦

東国の狸にまつわる昔話。動物報恩譚の一つで狸の恩返し。筆者の居住地群馬県館林市は、茂林寺の「文副茶釜」が有名であるが、ストーリーは別のもの。どんどろ山のいたずら狸のあかが罾にかかってしまう。それを、たきぎ取りに来た村人の左吉といいなづけのサキが助ける。お礼をしようとしてサキの家に向かうと、あかは村の庄屋どんとそのせがれの茂助が、サキに対しての企みしていることを知る。庄屋どんの企みにかかった左吉とサキは大弱り。そこにあかが登場。庄屋のせがれの茂助に嫁ぐことになったサキがどんどろ山を過ぎると…あかと仲間の狸たちがろくろ首や一つ目の大入道に化け、庄屋どん達を懲らしめる。その後庄屋どん達は二度とサキの前に現れず、あかの悪さの話も聞かなくなった。恩返しと勧善懲悪の内容に、読んでいて痛快感がある。群馬県には「たぬき田」という動物報恩譚もあり、狸の里に創作の昔話が一つ誕生した。なお、「まんが日本昔ばなし」では、「文副茶釜」や「たぬき田」も放映されており、いずれも常田富士男の語りである。

そのほかにも、入賞作品候補には、「あの世椿」、「天狗どんのやぶれたうちわ」、「おこん狐の話」、「雨乞い勝負」、「わらいきび」、「お宮さまの狐」、「川堤の柿」、「かいりき」、「おにと川のおはなし」、「かなづちカッパ」などが挙げられた。「創作」と「語り」の文学という主催者の趣意を理解し、今後のご健闘を祈る次第だ。

二 第2部 随筆部門 テーマ「秋祭り」 一般部門

木島平村長賞

馬追の唄 京都市西京区大枝沓掛町 蓮見国彦

昭和三十年代、愛知県尾張地方の農村地帯での秋祭りの思い出。農耕馬に神輿を担がせ、豊作を司る神へ奉納する。圧巻は、酒を飲まされ酩酊した暴れ馬を、これも酒を飲んだ村の若い衆が抑えるという神事。荒々しい神事が終わると、馬を持ち主に返すために、馬子たちが「馬追の唄」を歌いながら引き連れて行く。その後を村人たちが合いの手を入れながらついて行き、秋祭りは静かに幕を引く。米作りもまだ農耕馬を必要とした時代に、人と馬とが一体となって神への感謝を捧げる。機械化となってしまった現代では、農耕馬の出番はない。しかし、祭りの後の哀愁のこもった馬追の唄の響きは今も作者の心に残っているのである。

木島平米ブランド研究会長賞

祭り前夜 山梨県西八代郡市川三郷町 井上初美

昭和三十年代後半から四十年代初め、山梨県旧塩山市の秋祭りの思い出。来客をもてなす太巻きづくりにまつわる家族の絆を描いた作品。神饌として米を供えることが多い。作者の家庭での祭りのおもてなし料理の太巻きは、まさに神饌そのものなのだろう。夕食の食事だけでなく、土産としての太巻き。祭り前夜、作者が小さい頃は母親一人で忙しく立ち回っていた。作者が大人になり手伝いを始めると父親も手伝うようになった。次第に三人の役割が決まり、「ほれよ」「はい」というかけ声が響き合う家族の姿がそこにあった。あれから長い年月が経ち、作者はあの頃の母親の年齢を超え、父も母ももうこの世にいないが、ふるさとの秋祭りが近づくと、郷愁豊かにあの日々の光景が甦ってくるのである。

佳作1

祈りの矢 福岡県朝倉市 感王寺美智子

熊本震災の翌年、災害復旧支援を続ける夫と共に、気仙沼から阿蘇に引っ越した作者。初めての夏が過ぎ、少し涼しくなったころのこと。阿蘇神社の参道を散歩していると、軽トラに乗って流鏝馬のけいこをしている男性に出会う。阿蘇の田の四季と共に生きる祭りに思いを馳せていると、気仙沼の秋のさんま祭りを思い出し、ぐうっとお腹が鳴る。けいこの男性は言う。「祭りは、自然と共に生きる祈りと感謝。流鏝馬の三本の矢の一本は家族の為、一本は阿蘇の復興の為、そしてもう一本は気仙沼の復興を祈って射させてもらおう」と。田実祭の当日、三本の矢は見事に命中する。流鏝馬の矢に託す祈りは、秋の空に高く高く繋がっていく。秋祭りのイメージが、阿蘇に、気仙沼に、そして私の心の中に大きくダイナミックに広がった作品となった。

佳作2

ささやかな幸せ色の秋祭り 大阪府茨木市 鷺尾千恵

作者が小学校四年生の時の秋祭り。子ども神輿デビューの思い出。大阪の田園が次々に住宅地へと変わりゆく町。地域の秋祭りは収穫祭の意はなくなっていたが、地域のおっちゃん・おばちゃんたちと子どもたちの貴重なつながりの場だった。前日から配られた青い法被と豆絞りの手ぬぐいを身につけ、「わっしょい、わっしょい」と家中を走り回る。祭り当日、本神輿の後に続く子ども神輿。中学生達が神輿を肩に担ぎ、下っ端の小四は神輿の綱を持ってただ歩くだけ。それでも、自分も祭りの中心にいるような気がして誇らしい。休憩所で配られたのは、当時まだ珍しかった瓶入りの炭酸オレンジジュース。初体験の大人の味は、パチパチ弾けてのどにチクチク刺さって痛かった。遠い日の甘酸

っぱい思い出。五穀豊穰に感謝する秋祭りから、地区の人々の心の交流の場となった秋祭りではあるが、神（神輿）を通じて、地区の人々とのつながりは今にも繋がっている。

一般の部では、次の作品が受賞候補に挙げられた。「毎年の楽しみ、秋祭り」「小さな町内祭り」「山間の秋祭り」「幸せのカキ氷」「ただ一枚の写真をみつめて」「幸せな時間」

三 第2部 随筆部門 テーマ「秋祭り」 小中学生部門

タツノコ賞

温かい心 長野県 山ノ内町立山ノ内中学校 三年 徳竹 亜巳
山間部の小集落の地区での秋祭り。華やかな秋祭りのイメージはないが、小中学生も祭りの担い手として参加する。私の役割は、氏神様に奉納する「躍り」だ。本番の一ヶ月前から、小学生が三人、中学生が一人で「躍り」の練習をする。男女二人ずつだったので女の子は「躍り」、男の子は「大太鼓・小太鼓」と簡単に割り振られる。「踊り」といっても、太鼓のリズムに合わせて、飛び跳ねながら、頭の上でお椀をカチャカチャ鳴らすだけのもの。本番は、地区をぐるっと練り歩き、大人の笛に囃し立てられるように踊り続け神社でゴール。体力はヘトヘトだったが、アンコールで陣屋の舞台でも踊ることに。疲れながらも、地区の皆さんの声援を受け大きな達成感を覚える。祭りを通して小さな地区の秋祭りの中で、人々との心の温かさや絆を感じた作者には、温かい火がぼっと点った。なお、この作者は第3回タツノコ賞の受賞者でもある。

佳作

指輪 長野県 木島平村立木島平中学校 三年 水澤明日香
小学生の頃、友だちと秋祭りのおもちゃ屋さんの屋台で買った指輪に対する思い出。地区の祭りでは、小学生が自分で描いた灯籠で灯籠行列に参加する。道中は坂道が多くてつらいが、神社に着くと楽しみがある。たくさんの的屋の店が並んでいるからだ。それまでは、祭りの屋台での買い物には抵抗があったが、その年は友達と「何かおそろいの物を買おう！」ということになり、おもちゃ屋さんの屋台へ行く。手にしたのは、おもちゃなはずなのに本物のように輝く、オレンジ色の樹脂がはまっている指輪。手のひらを強く握って、落としていないか確認しながら帰る。私が今まで一番大切に扱っていたもの。中学生の今でもその友達とは親友でいる。これからも親友と離ればなれになっても、この指輪の思い出は、私にとって大切な宝物だ。秋祭りの屋台で買った指輪の思い出は、中学生になり、またこれからの進路で、友達と違う道に行くことになっても、私にとってはかけがえのないものだ。

小中学生の部では、次の作品が受賞候補に挙げられた。「秋祭りの思い出」「受け継がれる伝統文化『浦安の舞』」「クレープ」